

は豈^{あにただ}奮^{ふん}靡^みを起し骨に肉するのみならんや後進の仰いで以て泰斗と為すの期も亦将に爰^{こゝ}に在らんとす。今や不幸にして其学ぶ所の什一を試むる能はずして館^すを捐つ。歎^{たん}惜^{せき}の情に堪えざるなり(郵便報知新聞)」「(『明治過去帳』より)。

実兄の相良知安(1836-1906)は、明治初年に政府顧問オランダ人大尉フルベッキ、岩佐純らと謀り独逸医学の優秀性を熱心に説いて、政府にその導入を建白したことで知られている。政府はそれを受けて独逸医学の採用を決めた(正式には明治3年2月15日)。このような過程で元貞は兄を通じて間接的に影響を与えたことは十分に考えられる。ともかく1870年(明治4)8月にはドイツ人軍医(レオポルト・ミュラーとテオドル・ホフマン)が東校に着任し、日本政府との約束に従い直ちに東校の抜本的改革を行い、全くドイツ式の医育制度を採った。以後ドイツから多くの医学者が招聘されたが、その最大の存在がベルツであった。

結論として相良元貞は志半ばで倒れたが、ベルツの来日のきっかけとなるなど、意義ある生涯だった。

ライプツィヒにおける緒方正規

1880年(明治13)7月、東京大学医学部を卒業した緒方正規(1853-1919)は医学士の学位を受け、大学雇となり病院に勤務したが、同年10月25日付で文部省より生理学及び衛生学の研究のために3年間のドイツ留学を命ぜられた。師のベルツの勧められて最初ライプツィヒ大学を留学先に選んだ。同大学はベルツが来日前に講師として勤務していたところ。出発は11月14日でベルリン大学に留学する小金井良精(人類学者)と同船だった。

以下、主としてライプツィヒ大学の文書館所蔵史料によって事実関係を記しておきたい。「日本の熊本出身の緒方正規(緒方は自分の生年を1855年と記している)」が入学登録したのは1881年(明治14)4月25日である。在学期間はこの日から1883年(明治16)3月15日までの4学期2年間であった。住所はタール・シュトラセ31番地の3階(Thalstr. II)。ここには地質学研究のために留学した理学士の小藤文次郎も住んでいた。

緒方が受講した授業は次の通りである。

夏学期(1881)

生理学(ルートヴィヒ教授)

臨床講義(ワグネル教授)

化学実習(ドレックセル教授)

冬学期(1881/82)

生理学(ルートヴィヒ教授)

臨床講義(ワグネル教授)

生理化学・化学実習(ドレックセル教授)

生理学実験法(ガウレ博士)



緒方正規

夏学期 (1882)

衛生学 (ホーフマン教授)

尿検査 (ドレックセル教授)

生理光学 (フォン・フライ博士)

細胞論：組織論 (ガウレ博士)

冬学期 (1882/83)

生理学 (ルードヴィヒ教授)

一般病理学 (コーンハイム教授)

神経組織学：顕微鏡実習

『日本博士全伝』(明治25年・博文館)所収の「医学博士緒方正規君」によると、彼はライプツィヒ大学では「生理学博士ルードヴィヒ氏並ニ衛生学博士ホーフマン氏ニ就キニ学ヲ修メ胃中ニ於ケル中性脂肪ノ変化、腸中ニ於ケル食物ノ消化並ニ脾臓腺細胞新生等ニ就テ実験ヲ遂ケ其成績ヲ世ニ公ニシ」たのであった。その一つと思われるものが『中外医事新報』第49号(明治15年3月10日発行)の「医学新説」欄に掲載されている「生活胃内中性脂肪分解」と題する論文である。これには「左ノ一篇ハ独逸国ライプツィヒ府医学士緒方正規氏ノ試験説ニテ彼国ニ於テ印行セシ者ナリト云フ頃日或人ヨリ訳稿ヲ寄贈サレクルニヨリ茲ニ掲載シテ読者ニ報ズ」との注記がある。

内容は、師のルードヴィヒに命じられて行った実験の結果を報告したもので、二匹の犬を使い、その生体胃中において、中性脂肪が胃の上部にある腺から分泌する液によって分解する過程を詳細に記述している。

在学(受講)証明書(Zeugnis)の発行日は1883年3月13日であるが、それは同年5月9日にDr. M. Miura(三浦守治を指す)に手渡された。これは、その時点で既に緒方はライプツィヒを去り、次のミュンヘン大学へ転学していたために三浦守治が代わって受け取ったことを示していると思われる。三浦は病理学並びに病理解剖学の研究のため1882年6月から翌年8月まで、ベルツの勧めでライプツィヒ大学に留学した(『中外医事新報』〈第47号・明治15年2月10日発行〉の雑報欄参照)。三浦は緒方と同じタール・シュトラーセの1番地に下宿した。

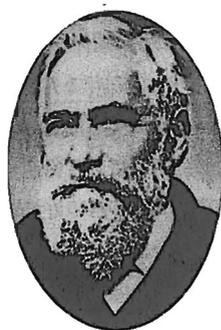
緒方はミュンヘン大学衛生学研究所において、有名なマックス・フォン・ベッテンコーフェル教授(1818-1901)のもとで研究した。これにはライプツィヒ大学で指導を受けたフランツ・ホーフマン教授の勧めがあったのではあるまいか。ホーフマンはベッテンコーフェルの弟子だったからである。ベッテンコーフェルは近代衛生学の基礎を作った人として知られ、この後、森鷗外はじめ幾多の日本人が彼のもとで研究したが、緒方はその最初の弟子であった。最近の独文誌『ヤープアン・マガツィーン』(1999年12月発行)掲載のアンドレア・ヒルナー女史の論文によると、ベッテンコーフェルに宛てた日本人医学生たちの書簡が多く残されており、それを見ると緒方にとってベッテンコーフェルは単に〈最も尊敬する枢密顧問官〉ではなかった。また彼は師を〈父〉(Vater)と呼び、衛生学研究所の助手たちを〈兄弟たち〉(Brüder)と呼んだ。

さて、緒方は前記『日本博士全伝』によると、ミュンヘンには5カ月留まり、ベッテンコーフェル及び生理学博士フォイトに就いて亜硫酸ガスが人体に有害であることの実験を行い、そ

の結果を発表した。その後ベルリンの衛生局に5カ月在学した。その時予定の留学期間は満ちたが、内務省より更に一カ年の学資を支給され、再度ミュンヘン大学に赴いた。1884年（明治17）3月には同大学の官仕助手に挙げられ、アルコール類の胃中消化に及ぼす作用を研究し、その成果を発表後同年12月に帰国した。それは森鷗外がドイツ留学に出発した2カ月後のことである。

緒方正規とペッテンコーフェル

衛生学の大家で、ミュンヘン大学に近代の実験科学としての衛生学を築き、その教授となったマックス・フォン・ペッテンコーフェル（1818-1901）は高齢のため来日はしなかったが、明治の医学生にとって神の如き存在であり、その教え受けに留学した者も少なくなかった。その中では森鷗外が最も有名であるが、ほかに中浜東一郎や小池正直、坪井次郎などもいた。ペッテンコーフェルの教え子たちは日本に帰ってから折に触れて集まり、ミュンヘンでの留学生活や師の思い出を語り合った。例えば、中浜東一郎は1892年（明治25）1月元旦東京から新年の挨拶を師に送り「先生のかつての日本の教え子たちは皆元気で、有能です」と述べている。



ペッテンコーフェル

だが、ペッテンコーフェルの最初の弟子で、師から最も愛されたのは緒方正規である。鷗外がミュンヘン市の宮廷街1番地の Hof-Apotheke 内にあったペッテンコーフェルの自宅を最初に訪ねたのは1886年（明治19）3月9日であるが、その時師から「君もかつて自分が愛した日本人学生緒方正規のようになってもらいたい」と激励されたという（『独逸日記』）

緒方は明治13年東大医学部を卒業後、生理、衛生の2科の研究のため文部省より派遣されドイツに留学した。最初ライプツィヒ大学でペッテンコーフェルの教え子であるホーフマン教授と、ルートヴィッヒ教授について生理学と衛生学を2年半学んだ後、ミュンヘンに転学した。そして衛生学研究所においてペッテンコーフェルに就いて、亜硫酸ガスの人体に及ぼす有害性についての実験を行い、その論文（Ueber die Giftigkeit der schwefligen Säure）を衛生学アルヒーフ誌 Archiv für Hygiene 第2巻（1884）に発表した。これを読んだ師は、緒方の自叙伝（『衛生学伝染病学雑誌』第15巻2号、大正8年）によると、

「貴君ハ僅ニ半年ニシテ実ニ興味アル學術上ノ研究ヲナセリ、若シ日本政府ニシテ貴君ノ留学期限ヲ延長スルアラバ君ヲシテミュンヘン衛生学助手ヲ拝命セシムベシ」

と述べたという。それで緒方はベルリンに行き、青木周蔵公使に師の書面を見せて、文部省に留学延期を依頼したが許可されなかった。そこでベルリンの衛生院（ゲストハイトアムト）でしばらく細菌学を学び、明治17年1月帰途に就きパリに赴いた時、内務省より更に1年間留学を延期せよとの命を受け、再びミュンヘンに赴き衛生学研究所の助手となった。今度はアルコール等嗜好品の胃の消化に及ぼす作用について実験し、論文（Über den Einfluß der